

研究経過報告書

2019年9月16日

研究員	所属 文学部 職 教授 氏名 村上純一
派遣期間	平成30年4月1日 ～ 9月6日
研究主題等	アンチ・グローバル時代のシティズンシップ
報告事項	<p>(研究活動の概要、内容、成果等、添付書類の見出し等)</p> <p>1. 派遣期間について</p> <p>イギリスのEU離脱が当初3月29日に予定されておりそれが実施された場合混乱が予想されたため、3月25日に入国する許可を求め了承された。実際にはブレグジットは10月に延期となった。また帰国日については、9月6日に共同研究者間で今後の研究方向について議論をすることになったため、9月10日出国11日帰国の許可を求め了承された。</p> <p>2. 研究主題について</p> <p>ヨーロッパにおいて、帰属意識の多重性、言い換えると多重アイデンティティすなわちナショナル・アイデンティティとヨーロッパ・アイデンティティの共存は、進化しつつあるものと考えられてきた。しかしながら近年イギリスでは、中東情勢の不安定化による難民及び移民の流入およびEUの東ヨーロッパへの拡大による労働者の流入が、国民の雇用と収入を不安定化させているという受け止め方が広がりつつあり、こうした問題を積極的に論じる極右政党が台頭し、ヨーロッパ・アイデンティティに対する疑念がもたらされてきた。2016年に行われたEU離脱を問う国民投票では僅差で離脱が残留を上回り、いわゆるブレグジットが決まった。</p>

<p>報告事項</p>	<p>ギフォード教授は、2008年にその著書『イギリスにおけるヨーロッパ懐疑主義の形成The Making of Eurosceptic Britain』（邦訳なし）で、上のような流れを予見し、その分析を行った。グローバル経済の進行は、イギリスにおいても、雇用、家族、地域社会などに不安定化をもたらしている。20世紀末のイギリスにおけるシティズンシップの概念は、1998年クリック・レポートに示されたように、多文化性と寛容を基調としたものであった。しかしながら、グローバル経済の進行は、それに対する疑念をもたらしている。</p> <p>こうした状況を捉えるための枠組みを設定する試みとして、ギフォード教授、マイコック教授と私は、2013年に共著論文「後期近代における市民形成ー日本とイギリスにおける若者の比較Becoming Citizens in late modernity : a globalnational comparison of young people in Japan and the UK」を発表した。この論文は、従来のシティズンシップ論が「市民であることbeing citizen」に焦点を当てていたのに対して、後期近代においてそれは「市民となるbecoming citizen」により焦点を当てるべきであると論じたものである。この論文はその後様々な研究者によって引用されていることから見ても、新しい問題の糸口を掴むものと評価しうるだろう。</p> <p>今回の渡英では、若者が「市民となる」ための諸条件をさらに吟味したいと考えた。その文脈において特に「メリトクラシーmeritocracy」の位置づけについて考察したいと考えた。メリトクラシーとは、イギリスの社会学者マイケル・ヤングの造語であり、日本では「業績主義」と訳され、社会学では広く用いられる用語である。</p> <p>最初の発見は、意外なところで見つかった。メリトクラシーという言葉がイギリス発祥であるため、私はこの用語はイギリスでも日本と同じように用いられているものと思い込んでいたが、それは間違いであった。メリトクラシーは、イギリスではマイケル・ヤングが描いたディストピアそのもののイメージで、日本の社会学会におけるような中立的な意味で用いられることはほとんどないということであった。</p>
-------------	---

報告事項	<p>私としては、メリトクラシーの概念を前提として、その条件を考えようとしていたところであったが、そう簡単ではなかったということだ。それは言い換えると「頑張って成果を得た者が報われる社会」のイメージが、「市民になること」の条件として重要ではないかという見通しであったが、「頑張って成果を得た者が報われる社会」は、イギリスではメリトクラシーの用語では一般に表現していないということであった。そこで、メリトクラシーの概念について、共同研究者間でしばらく議論を続けた。参照した論文は、ハンガリーの教育心理学者フューロップによる「共同的で競争的な市民、それはどういう意味か? Fulop, M. (2013) The Cooperative Competitive Citizen: What does it take?」と社会学者のロックウッドによる「市民統合と階級配置 Lockwood, D. (2010) Civic Integration and Class Formation」である。前者は、「共同的」であることに比べて「競争的」であることは、シティズンシップ論の中でしばしば否定的に扱われてきたが、それを見直そうという試みである。後者は「理想的な市民」という概念をフィルターにして、人々が自らの立ち位置を計っているのではないかという論である。こうした議論を読み合いながら、メリトクラシーの概念について再検討することに意義があるだろうという共通認識に至ることができた。</p> <p>5ヶ月という短い期間であったが、二人の共同研究者と顔を合わせてゆっくり議論する機会が与えられたことは、電子メールだけのやりとりでは得られない微妙なニュアンスを吟味することができた点で、大変有意義であった。</p> <p>今後の課題として、日本の社会学、教育社会学でメリトクラシーの概念がどのように使われてきたか、イギリスではあまり知られていないように思われたので、これを紹介するという点が浮かび上がったので、次の4点について、引き続き協議することとした。</p> <p>1) 上記課題に関して、イギリスと日本の共同研究を支援する科研費ないし基金を探ること。</p>
------	---

報告事項	<p>2) この研究を進めるに当たって協力する団体はどれかを探ること。(イギリスではYougovであり、日本でこれに相当する団体はどれかを探し、協力を打診すること。</p> <p>3) 学術的な研究であると同時に何らかの形で政策決定に影響を与える研究を目指すのであれば、どのような団体と連携することが可能であるかを探ること。</p> <p>4) 日本における関連諸研究の英文抄訳を作成し、イギリスのそれとの比較を行うこと。</p>
------	---